



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

協働の地域づくり

私は若い頃青年団に入団して以来今日まで、約半世紀にわたって仲間とともに様々な地域協働活動を行ってきました。その半世紀の社会情勢を振り返ってみれば、昭和四十年代から始まった最初の十五年は、むらおこし御三家といわれる特産品開発・地酒・太鼓の全盛時代で、一村一品運動の大分県などに注目が集っていました。その後十五年はまちづくり御三家といわれるイベント・人づくり・シンポジウムが流行りだし、ふるさと創生一億円の後押しもあって、様々な市町村が様々な知恵を出し合い、オンリーワンのキラリ光る町を目指してしのぎを削りましたが、更にその後の十五年は、厳しい財政事情もあって、未来を見据えた市町村再編が進められ、平成の大合併により、三千二百余りの市町村が千七百四十二の市町村に激減し今日を迎

えています。人口減少と高齢化、少子化が予想以上に進行し、限界集落を抱える地方では空き家が目立ち、自治体存亡の危機に直面しているところもあるようです。合併して一時的に人口が増えたと錯覚している自治体も沢山あって、広域化した地域ゆえ起こった行政サービスの低下による住民の行政不信は根強く、自治体内でのなし崩しの中央集権に不満を持つ住民に対し、地域づくり御三家といわれる協働参画・地域自立・地域間交流を唱えて地域づくりへの関心を引こうとしています。が、笛吹けど踊らずといった感じは否めない事実のようです。

「きょうどう」で思い出す漢字には、「協同」と「共同」、それに「協働」の三つがあります。「協同は」協同組合、「共同」は共同募金を思い出すように、それぞれの言葉を使い分けていますが、広辞苑によると「協同」と「共同」はいずれの意味も「複数の人や団体が力を合わせて物事を行う」と書かれていて大差はないようです。一方「協働」は「同じ目的のため協力して働くこと」と微妙に違った、実労主体の意味づけがなされているようですが、見方によっては協同も共同も協働もそんなに大きくかけ離れて

いる訳でもなく、行政にその違いについて説明を求めても、はっきりした説明ができる人は殆どなく、行政特有の言葉遊びのような感じもするのです。

さて「きょうどう」で思い出すのは、松山市南堀端にある愛媛県農協会館前の石碑です。「一人は万人のため、万人は一人のため」と書かれています。浅はかな知識ゆえ確かなことは分りませんが、この言葉は小説三銃士に出てくる、ダルトニャンが発案した友情の言葉を日本語に直訳したものらしいのです。三銃士と農協運動の間には何の関係もないものの、この短い言葉に秘められたイメージが、「協同」を言い表すピッタリの言葉であることは言うまでもありません。と同時に「協働」についてもこの言葉は、「一人」と「みんな」のあり方を上手く表現しているような気がするのです。

これまでの地域づくりはどちらかと言うとハードは勿論のこと、ソフトまでも行政主導で行なわれてきました。しかし急速に進む少子高齢化や価値観の多様化に行政は対応することができず、加えて



頻発する自然災害への取り組みなども増え、「協働と参画」なしでは地域づくりができなくなりつつあることも事実です。

私は高齢ながら町内に数年前発足した、「まちづくり学校双海人」というグループに所属し、三十人余りの会員とともに毎月一回の定例会に参加、この五年間色々なことを学んできましたが、そこで話されたことを「いいことは直ぐに実行する」「悪いことは直ぐに止める」と仕分けして活動してきたことは、まさに協働であるような気がするのです。私たちは日々の暮らしの中で様々なことに気がきます。しかし気付いた欠点をややもすると他人や社会のせいにしてブツブツいいながら日々を過ごしていますが、それだけでは何の問題解決にもなりません。何が問題でどうすれば解決できるか集団の学びの中で考え合い・支え合い・繋ぎ合う仕組みを持つ事が大切です。合併時に各地で作った地域審議会的な組織は、「あれをして欲しい、これをして欲しい」という行政への要望が主体で、誰がするのといった「協働と参画」について話し合うことは殆どなされなかつたため、自然消滅の憂き目に遭いました。

また百人の一步を目指すローカルコミュニティに徹する余りに、一人の百歩を目指すテーマコミュニティをないがしろにしてきました。

先日私が主宰する私塾年輪塾の学習のため西予市野村町の山奥組を訪ねました。「ふるさとに夢と誇りを」をスローガンに、「むらの新資源研究会」として十年ほど前に発足した会費で運営するこの会は、ご他聞にもれず平均年齢もかなり高いものの、山村特有のかなり厳しい社会問題に真正面から取り組んで協働実践し、それなりの成果を出しているようでした。中でも地元出身の元高校校長先生を講師に、「こども漢文教室」を一年間に四十九回も開講していることにビックリしました。最初は一人の子どもから始めたそうですが、今は受講する子どもも九人となっているようです。かつて私は漢文教室を立ち上げた井上さんと一緒に、佐賀県多久市で行なわれた全国各地づくり大会の分科会に参加しました。「多久の雀は論語を語る」と言われるように、孔子廟のある多久市では子ども時代から論語を学び、私たちに論語の解説までしてくれ、参加者を大いに驚かせました。山奥組の地域づくりと漢文教室

は一見何の関係もないように思われますが、十年後二十年後のふるさとを見据え、子どもを村の新資源ととらえて人づくりに励む姿に深い感動を覚えました。子どもを育てることを学校に任せるだけでなく地域が協働で育てることは、今流行のコミュニティスクールという言葉以前に地域が持っていた地域の教育力そのものなのです。

最近「住民参加」という言葉も行政用語としてよく聞きますが、よくよく冷静に考えれば、むしろ住民の参加協働の仕組みや活動は既に出来上がってそれなりの成果を上げているのに、行政職員の参加など殆どないのが実態で、むしろ「住民参加」を言うのであれば「行政参加」こそ必要ではないかと思っています。

「五十年 協働活動 やってきた
これから先も 生きてる限り」

「行政は 住民参加と いうけれど
行政参加が 本当じゃないの？」

「一番は 何といっても ふるさとを
愛する心 それさえあれば」

「ふるすとは 古里と書く これからは
新里と書いて ふるさとと読もう」
(若松進一 の笑売啖阿)